

2022年7月

営農だより



営農部 営農指導課	TEL (0774) 62-5890	FAX 62-9450
北部営農経済センター	TEL (0774) 64-7200	FAX 64-7205
南部営農経済センター	TEL (0774) 76-0003	FAX 76-0005

水 稲

豊かな実りを目指す稲作中期の管理

7月は、梅雨の後半から夏に向かって天気の変動が大きい時期です。台風や梅雨前線の活動の強弱、梅雨明けの早晩でも大きく変わります。6月21日発表の3か月予報によると、7月の天候は前半は平年比べ曇りや雨の日が少なく、後半は晴れの日が多い、降水量は平年並みか、やや多いと見込まれています。近年激しさを増す梅雨末期の大雨や台風の襲来に備え、水路の管理や清掃を行っておきましょう。

I 水稲の栽培管理

◆ 中干し

早期・早植栽培では6月下旬に終わりますが、梅雨の雨が続き、田面にひび割れが見られなければ、しばらく中干しを続けてください。

普通・晩植栽培では7月に入って平均茎数が20本/株位になれば中干しを始めます。梅雨明けすると乾きやすくなるため、大きくひび割れしない程度で一度入水し、7月中に再度干すのも良いでしょう。ひび割れが過ぎると水が溜まらなくなる場合がありますので乾き具合を見て判断してください。

◆ 幼穂形成期と穂肥

早期・早植栽培では6月末～7月第一半旬(1～5日)頃が穂肥期と見られます(一発施肥を除く)。穂ばらみ期以降は急速に穂が生長しますので、田に水を切らさないように管理します。7月第6半旬(26～31日)頃に出穂期を迎える見込みです。

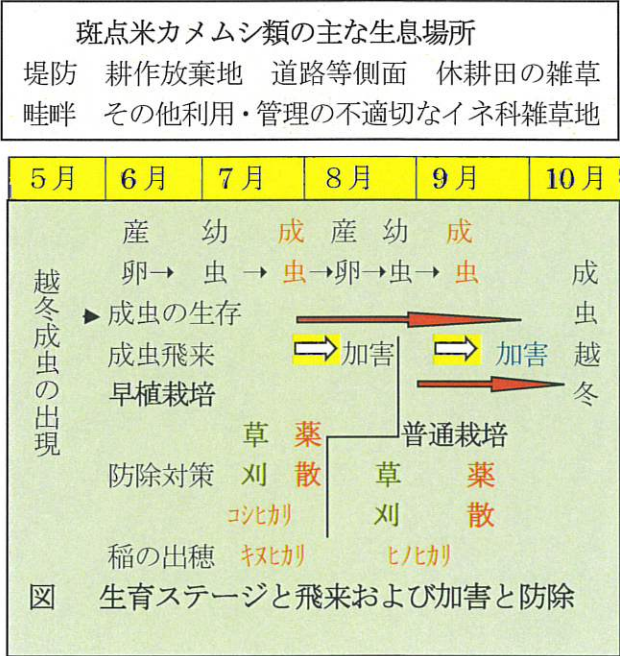
普通植栽培の穂肥は8月上旬が見込まれます。出穂期や穂肥量等は、それぞれのほ場について、栽培者自ら幼穂(穂の素)が出来たか確認した上で、穂肥の施用をしてください。一発肥料では原則として穂肥は不要です。

幼穂形成の確認は、平均的な生育をしている場所の株の草丈の最高葉の茎を抜き取り、最上葉の葉鞘(ハカマ)の基部(節)の上部を切り開いて幼穂の長さが5～10mmになっていれば、京都やましろ有機穂肥の場合は全量を1回にまとめて、化成肥料17-0-17などの高度化成は10日後の2回に分けて半量ずつ施します。

II 病虫害対策

◆ カメムシ

主な生息場所は水田周辺の雑草です。稲が出穂し稔実し始めると周辺から飛来し、図のように吸汁加害します。出穂の10日前頃の水田周囲の草刈りと、穂が傾き始めてからのスタークル・アルバリ



ンなどの薬剤防除を徹底します。

◆ 紋枯病 : 近年、紋枯病の発生被害が増加しており、病徴が止め葉に及ぶことも少なくありません。病状が進むと倒伏稔実不良を生じます。菌核で越冬しますので、毎年発生する水田では、肥料を控え目にして過繁茂を避け、7月上中旬にモンカット・モンガリットなどの粒剤を畔回りを重点に散布して初期発生を抑えてください。

◆ 葉いもち : 梅雨期間中に4～5日以上曇雨天が続いた場合で、いもち病予防剤の箱施用(側条施用)を実施していない場合は発生に注意し、発生を認めたら速やかに防除をしてください。

◆ トビイロウンカ : 昨年は発生を見ませんでしたが、梅雨入り前後の低気圧・前線活動により飛来するかもしれません。日本国内では越冬することは無い害虫ですが、発生すると大きな被害が生じることがありますので油断はできません。

京都府等からの発生情報が入れば、速やかにメール配信サービス等でお伝えします。

野菜

梅雨後半から梅雨明けの野菜栽培管理

近畿地方でも例年比8日遅い6月14日に梅雨入りしました。近年の梅雨の傾向は大雨か晴れかと、大きく変動します。このため、大雨や風に備えて排水対策、支柱の補強、病害予防と初期防除を、晴天続きには灌水対策と害虫の侵入防止や早期発見、初期防除の準備をして、被害に至らないよう対策を進めてください。

I 梅雨後半の大雨・台風対策

◆ **事前対策** 梅雨後半には前線活動の活発化や台風の襲来に備えます。

雨と風に対する補強対策を行います。

ハウス栽培ではハウスのバンドの緩みや周囲の排水溝の点検実施、排水路への接続を確実にします。露地栽培では支柱の補強、誘引・整枝、剪定・摘葉、畝間の残渣整理、敷き藁・マルチの実施、排水溝・水路点検、土留めを事前に済ませます。

◆ **事後対策** 大雨で浸冠水した場合は出来る限り早期排水に努め泥は洗い流し、ごみは除去します。排水後損傷枝を除去し、支柱等の点検と補強を行い、収穫・整枝・剪定を行い病害等の恐れがある場合には薬剤散布を行います。

◆ **梅雨明け後対策** 梅雨明け後は強日射が予想されます。露地のナス、えびいもは十分な灌水に留意します。ハウスのトウガラシ類を秋まで栽培する場合や軟弱野菜では、ハウス外遮光60%程度を行い高温の抑制を考えてください。また、乾燥すると良品生産に影響します。根痛みを起こさないよう畝間灌水は水位に注意しながら、チューブ灌水は地温が低下してから適度の灌水に努めてください。

II 病虫害防除

◆ **病気** ハウス栽培果菜類では乾燥気味になりうどんこ病に注意が必要で、高温多湿になるとキュウリの炭そ病、褐斑病が発生しやすくなります。露地では梅雨期間中はキュウリのべと病、疫病、ナスの疫病、褐色円星病に注意です。

梅雨明け後はナス科野菜の青枯病、半身萎凋病が発生しやすいですが、梅雨期間中から畝間灌水の水位変動や常時湛水を少なくして根痛みを防ぐことが予防になります。

◆ **害虫** 降雨が減少すると共に発生が多くなります。梅雨期間中でも晴れ間が続くと雨の掛からない下葉や葉裏でハダニの発生が始まります。よく観察し初期防除に努めてください。

露地ではアブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、ナスのテントウムシダマシ、コガネムシ類、オオタバコガ、カスミカメ類、キュウリのウリハムシ、ウリノメイガ、えびいものハスモンヨトウ、ズメガ類、軟弱野菜のコナガ、キスジノミハムシ、ネギアザミウマ、シロイチモジヨトウ等に注意です。

TAC 巡回現場より ～LED 光で農産物を守る～

近年、人の健康へのリスクと環境への負担を軽減するための概念として、IPM（総合的病害虫管理）が国際的に提唱されています。茄子圃場で設置されている黄色の光を利用したヤカ類害虫防除はそのひとつの手段として注目されています。

茄子圃場で多発する「オオタバコガ」は、若齢幼虫が新芽の先端や葉、花、幼果を食害するため、収量が低下します。また、中老齢幼虫は果実の中にも食入するため、被害のダメージは大きく、商品価値が無くなります。

オオタバコガの成虫は夜行性です。光による防除法は、黄色蛍光灯を設置して終夜点灯することにより、この成虫の行動を抑制し、被害を減少させるものです。

省電力な商品では株式会社ネイブルの害虫防除 LED ランプ「レピガード ST」があります。太陽光発電を利用する同社商品もあり、現場での導入実績もあります。

今後も新技術等を定期的にご紹介させていただきます。